『質的心理学研究』第18号
巻頭言
多様性をひろげる

『質的心理学研究』第18号を無事みなさまのお手元に届けられることとなった。今回も質が高く読
み応えのある論文が、一般論文、特集論文合わせて15本掲載されている。304ページというボリュー
ムは過去最大のことで、質・量ともに充実した号になった。

第17号の巻頭言では「スタンダードを超えて」と題して、アメリカ心理学会が質的研究の評価基準
（スタンダード）を定めたことを受けて、スタンダードの枠を広げ、超えるような挑戦が重要だと述べ
た。一般に、保守と創造のジレンマ、あるいは（過剰な）保守化にどう抗うかは、ある程度の期間存続
している組織には必然的につきまとう課題である。社会構成主義の旗手であるケネス・ガーゲンによ
れば、この課題への鍵は、組織内の異質性を賦活し、対話の枠を広げることである。

その点からすると、質的心理学会、『質的』という看板のもとに、研究分野（ディシプリン）、研究
テーマ、研究方法など、多くの面にわたってきわめて多様な研究者が集まっているという強みがある。
編集に関しても、査読プロセスが投稿者と査読者の対話の場であることを明記し、対話を通じて論文
の質を少しでも高くなることを目指してきた。

関連して、今年度（2018年度）から査読体制を刷新した。具体的には、編集委員のほかに、投稿論文
の査読を担当する「査読委員」を新設し、専門分野がさまざまな30名の方に委嘱した。従来十
数名の編集委員ですべての査読を担当していたのと比べると、よりきめ細やかな対話が可能になるだ
ろうと期待しているところだ。

最後に、これで編集委員長の3年の任期を終えることになる。どうにか無事に編集委員長の職務を
まとうことができるのは、編集委員会の先生方、事務局のスタッフ、そして何よりも質の高い論文を投稿く
だされる会員の皆様のおかげである。心から感謝申し上げたい。

編集委員長　永田素彦
目次

巻頭言　永田素彦　多様性をひろげる

特集：ゆるやかなネットワークと越境する対話——遊び、学び、創造
（責任編集委員：香川秀太・青山征彦）

■ 朴希沙　………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………　7
「してもの会」における Respectful Racial Dialogue の実践
——在日コリアンと日本人の「分断から動き出す交流」

■ 山下愛実　……………………………………………………………………………………………………………………………………………………　26
幼稚園の一斉保育場面で子どもたちが創り出す「あいま」の意味
——ウェンガーの「非公式の」実践共同体概念を手がかりとして

■ 小林惠子　……………………………………………………………………………………………………………………………………………………　41
後ろ向きの越境と境界の変容に関する研究
——危機に直面した企業組織でのフィールドワークから見えてきたもの

■ 岡部大介・大谷紀子　………………………………………………………………………………………………………………………………　61
アーティストと人工知能技術の協働作曲にみる創造と省察

■ 橋本栄莉　……………………………………………………………………………………………………………………………………………………　76
難民の実践にみる境界と付き合う方法
——ウガンダに暮らす南スーダン難民の相互扶助組織を事例として

■ 最上雄太・阿部廣二　………………………………………………………………………………………………………………………………　95
再帰的リーダーシップ試論
——正統的周辺参加論による関係的アプローチの課題克服可能性とその意義
目次

■ 会津律治………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………116
客と店との偶発的協働による振る舞いの集合的学習過程
——仏レストランのマネジメントから

■ 山口洋典・渥美公秀・関嘉寛………………………………………………………………………………………………………………………………………124
メタファーを通じた災害復興支援における越境的対話の促進
——新潟県小千谷市塩谷集落・復興10年のアクションリサーチから

一般論文

■ 山田苑幹………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………144
X ジェンダーを生きる
——男女のいずれかというわけではない性自認をもつ人々の語りから

■ 小泉千尋………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………161
サイエンスカフェにおける話題提供者のフレームシフト

■ 渡辺恒夫………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………176
コミュニティ（人づきあいが苦手）の批判的ナラティブ現象学
——インターネット上の相談事例に基づく当事者視点の研究

■ 長友隆志………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………197
日本人高校生の自己効力感とメタ認知に対する英作文の指導とフィードバックの効果
——GTAによる分析

■ 石井悠………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………217
小児慢性疾患経験者にみるイルネス・アンサーテンティの発達的影響
——成人期における将来展望との関連に着目して

■ 五十嵐茂………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………242
自己エスノグラフィにおける意味の文脈
——ある転職体験

■ 荒川歩・白井美穂・松尾智康・加藤賢大……………………………………………………………………………………………………………………………263
インタビューの語り手としての特性と質的研究
BOOK REVIEW

■ 《書評特集》当事者研究

当事者研究をローカルな研究実践から、質的研究のモデルへと一般化するために（森 直久）………274

「自分自身で、共に」が教えてくれること（評：宮本 匠）……………………………………………………276
浦河べてるの家（著）『べてるの家の「非」援助論——そのままでいいと思うるための25章』

じぶんアクションリサーチとしてのからだメタ認知メソッド（評：伊藤 崇）………………………………………………277
調査正樹（著）『こつ」と「スランプ」の研究——身体知の認知科学

「当事者研究」はポスト心理療法になるのか？（評：村澤和多里）………………………………………………280
浦河べてるの家（著）『べてるの家の「当事者研究」』
調査正樹・熊谷晋一郎（著）『つながりの作法——同じでもなく違うでもなく』
熊谷晋一郎（編）『みんなの当事者研究』

編集委員会からのお知らせ………………………………………………………………………………………………………283
『質的心理学研究』規約……………………………………………………………………………………………………287
投稿に際してのチェックリスト…………………………………………………………………………………………………290
『質的心理学研究』特集と投稿のお知らせ…………………………………………………………………………………291
英文目次……………………………………………………………………………………………………………………………295
『質的心理学研究』バックナンバー……………………………………………………………………………………………296

表紙デザイン 白井新太郎
今では当たり前となった資本制、そして近代国家システムが誕生し、その勢力を拡大していくとき、
境界、そしてその越境はますます重要なテーマとなった。

遡れば、中世の封建時代が終わりを告げていたころ、国家は、各地方の領主に分散統治されていた土地の
集権管理を進めた。それは、税制や所有権を定め、その統一規格化を図ることを通じてであった。そ
うして、それまで同じ地域の農民に張り付いていた農民が、その地位（境界）から解放され、都市部で
工員になるなど、同じ国家内を同じ制度の下、モノや金とともに、自由に移動していく仕組みが生まれ
た。そして次の段階として、自国の境界を超えて、自らの規格（刑法、税法、商法）の支配下に他国、
他領域を置くよう、植民地化や自由貿易化を進め、勢力拡大に努めた。そうして、金、人、資源が世界
をめぐり、グローバリズムが誕生した。一方、国家内が統治権、つまり、自らの規格の適用範囲（境
界画定）をめぐって争う、近代に続く領土紛争も始まった。デュランとペルニエはこのような資本制
誕生を振り返る。今の社会は、こうした長きにわたる歴史の延長線上にある。

資本主義および近代国家とは、ここからもうかがえるように、発祥の経緯からして、一方で、「既存の
境界の解放」を、他方で、「新たな境界の画定」を積極的に進めていく世界システムである。その主
たる動機は、経済的利潤の追求にありそれを土台とする。こうして、経済発展、技術革新が進み、生活
の利便性が劇的に上昇するとともに、さまざまな矛盾や煩いもまた生まれた。例えば、19世紀まで
に歐州列強が行った、対アフリカに代表される植民地政策は、1884年〜5年のベルリン会議を経て、アフ
リカ各国のきわめて恣意的な国境線を外側から形成し、それが今に続く紛争の火種となっている。他
方で、1990年代にアメリカ、カナダ、メキシコが結んだ北米自由貿易協定（NAFTA）、つまり経済的な
境界の解放の動きもまた、経済格差を助長し、その煽りを食うメキシコで、サバティスタによる民族解
放運動のような抵抗運動が起こった。これは、その後の世界各地の反グローバリズム運動に続く。

そして、20世紀、国家、国家間のレベルだけでなく、イリイチが言うように、産業主義の発展により、
医療に代表される「専門職化」という、職や知識の境界画定の実践がますます進んだ。つまり、さま
ざまな資格化が試みられ、特定の専門家による知識の専有化と、分業化が進んだ。こうして、専門家で
なければ扱えない知識領域や実践領域が増え、専門家と非専門家との境界が増大した。例えば、医療
では、日常的な健康問題から高度な医療まで、専門家が面倒をみるようになっている。これは、生命
の領域まで、経済的観念が侵され続けたことを意味する。また、学問分野においても、専門分化
と雑多化が進み、元々統合的であった学問に、あえて学際を主張しなければいけない状況、それがス
テータスにすらなる状況を生んだのは周知のとおりである。

その他、共通尺度や標準化による数値化、それに伴う単一物差しでの序列化、管理が広がった。俯瞰
的な数値による把握と現場の管理は、まさに既述のとおり。集権的気質が好む方法論である。むろんそれは、あくまで一つの視点——フーコーが言うようなパノプティコン的な——からの事実構成に過ぎないにもかかわらず、それこそが最も説得力のある表現であるかのように権威化された。そして、その創造的な（ある種）抵抗運動として本学会の活動が生まれ、未来形成活動の一端を担った。

そして、今、まさに以上のようにしてつくられた、世界経済、資本制という「大きな枠組み（世界システム）」の境界それ自体を、意図の有無にかかわらず、あるいは前向きな意味で撹乱させることにつながるうる萌芽的な動きが社会のあちこちでみられる。

集権型の社会形態に代わるものとしての分散型社会というイメージの浸透。既存の分野や集団の枠を超えて多様性が結合し、互助、共生関係や、それを軸にした新しい贈与経済システムの生成。もしくは、境界それ自体が曖昧となり消失さえするネットワーク型活動の活発化である。例えば、金銭的利益獲得を軸とする、社会課題解決を動機とするソーシャルビジネス、非営利活動、地域コミュニティの形成活動は、とりわけ既述の要素がすべて凝集された出来事、つまり2011年の東日本大震災以降、ますます活発化し、さまざまな領域でユニークで小規模な実践活動を生み出し、野火的に拡大している。

むろん、これらに限らず、ローカル経済、専門職という枠の解放、参加型の創造活動、評価軸の多様化などが試みられ、それらは、既存の仕組みを（と）遊んで、崩して、創りかえる。そして、新たな活動の創造こそ学習の基盤だという身体感覚を増大させる。

以上の新たな動きは単に、資本制や国家の否定なのではなく、それが蓄積してきた重層的諸矛盾を乗り越えようとする、一つひとつは小さな進歩である。それらの連帯、関係体こそが、次の新しい世界史を切り開く。

この先にあるものは、もしかすると、専門職や研究者の解放かもしれません。しかし、決してそれは悲観すべきものではない。なぜなら、専門性は、特異な人々との結合を前提とした異質性へと転換され、ますますの唯一性を探求していく新たな歓びを生むからである。

本特集号のテーマである、越境、そして、ゆるやかなネットワークとは、こうした世界史上、ある意味で突き動かされて生まれた。地域コミュニティ、テクノロジー、難民など、魅力ある題材で書き下ろされた8本の特集論文のいずれも、その例外ではむろんない。誰も歴史から逃れることはできない。よって、本特集はある意味で、社会構成主義、活単論の一つの到達点であるとも新た、新しい出発点ではないか。言外のポテンシャルを含めて、何を萌芽として読み取るか。すべての人々に、この問いはひらかれている。

特集 責任編集委員 香川秀太・青山征彦